木澤成肅編纂

小學初等脩身幼訓

卷四

東京圖書館
新
日本教育會書籍館
第二室
四函 二架 二七九四号 五冊
匿一架一號

K110.1
184

木澤成肅編纂
蒲生重章校閲

小學初等 修身幼訓

巻四

明治十五年三月廿八日版權免許

國立教育研究所附属図書館蔵書
東京図書館蔵書

修身幼訓巻の四

木澤成肅編纂
蒲生重章校閲

第十

○家を保つ此道は、勤と儉とにあり、勤儉なきバ、財産失はゞして、克く家を保りがたし、二此者も、併び行ひて、一を缺くべからゞ、蓋し勤儉の工夫ハ、忍ふ在り、忍は耐ふ在り、勞苦に耐へて克く勤め、私慾を制して、儉約を

行ふべし　貝原益軒ノ格言

○宋の范純仁、子弟を戒めて曰く、人至愚なりと雖も、人を責むるを明かなり、聰明なりと雖も、己を恕するを昏し、爾ゞ曹、但常に人を責むるの心を以て己を責め、己を恕するの心を以て人を恕せば、賢聖の地位に到らざるを患へざるなり　小學

○深黙にして測るべからざるを、深黙にして測るべらざる者に、人と親み難し、且人に疑惑を起さしむ、夫我人に深黙なれば、人も亦我に深黙なり、此の如くなれば、畢竟我世間の事に暗し　智氏家訓

○子路の人之に告るに、過あるを以てすれば喜ぶ、禹は善言を聞く時に拜す、大舜の大きより大なる事なり、善を人と同じくし、己を捨てゝ人に從ふ、人に取て、以て善を爲に樂しむ　孟子

○明の蔡虛齋曰く、人の道を立つるは、仁と義

と曰ふ、蓋し凡一切此人に接し、一切の事に應ぜ、皆當さに仁を以て主と爲すべし、仁の行ひ去らざるに至てい、便義を以て之を裁す、故に窮まらば畜德錄

○身の長ぜる所、上知らぬと雖も、以て君に悖らず、身に短なる所、上知らずと雖も、以て賞を取らず、長短飾らず、情を以て自ら竭し、是の如くなれば、直士と云ふ荀子

○人倫要鑑に曰く、善を行ふの人は、春園の草の如し、其長ぜる所見ざれども、日に增す所あり、惡を行ふの人は、刀を磨するの石に如し、其損ずる所見ざれども、日に虧くる所あり穀詒錄

○君子の學に於るや、藏焉修焉息焉游焉、夫然り、故に其學に安んじて、其師を親み、其友を樂みて、其道を信ず、是を以て師輔を離るゝいへども、反せざるなり禮記

○明の孫子度曰く、天下極て詐り、極て險か

れの人を、吾至誠を以て之を待てば、其險詐を將さふ用ゐる所ふからんとす、而して亦相感ずして以て誠ならん、若し機智を以て之を待御ぐば、愈〻其潰決を甚しくするなれ也　張揚園集

○曾子曰く、父母之を生ず、子敢て殺さば、父母之を置く、子敢て廢せば、父母之を全ふす、子敢て闕かば、故ふ舟して游ぐが、道して徑せば、能支體を全くして、以て宗廟を守る孝と謂ふべし　呂氏春秋

○木、繩を受くれば直く、金礪に就けば利し、君子博學にして、日に己を三省すれば、知明かにして、行ひ過舉ふし、故に高きに登らざれば、天の高を知らず、先王の遺言を聞かざれば、學問の大ふかを知らず　荀子

○君子と遊ぶは芝蘭の室に入るが如し、久しくして聞かざるは、則之と化する也、小人と遊ぶは貨殖と鮑魚の次に入るが如し、久しくして聞かざるは、則之と

化するなり　大戴禮

○愛我立ふい親より始るは、民よ睦を教る也、敬を立るは長を始れい、民ふ順我教る也、教るに慈睦を以てして、民親あれを貴び、教ふふ敬長我以てして、民命を用れ我貴ぶ、孝以て親ふ事へ、順以て命我聽く、諸を天下ふ錯て行れざる所なし　禮記

○恕して之我行ふい德の則也、忠い德の正也、信て德ゝ固也、卑讓い德の基也、德よ非ざ

れど勤ふ如くい、なし、勤にあらざきど、何我以て人を求めん、能勤むれど繼く大ゆあ　左傳

○今人の病痛、只是一箇の傲ゝ字、千罪百惡皆傲より生じ、謙抑て乃是對症の藥かり、謙抑い但外貌の恭敬のみならず、其自から視るゝ卑欲然、己不足ゝ處あ、不是の處ゆる我見て、纔よ能く己を虛くして益を受く、　王陽明ノ格言

○賦を輸し役よ應ど、力我勉め事に從ふ義の當さに然る所、を一人ふ先だつ能て

ばれも、必ず時に後るべからば、特よ分ホ安んじ、誼ヲ守ふれとならず、亦罪に遠ざかる所以なり 張楊園集

○拱把れ桐梓、人苟も之を生ぜむと欲そる少きは皆之ヲ養ふ所以の者を知れ、身よ至ヲて亡、之を養ふ所以れ者ヲ知らば、豈身ヲ愛そふこと、桐梓よ若かざらむや、思はざはの甚しきなり 孟子

○宋の張無垢曰く、明を内よ用ゐる者も、己が過を見ふ、明ヲ外よ用ゐる者も、人の過ヲ見はふ、己が過を見る者は、天下皆己よ勝るを視れ、人の過ヲ見ふ者も、天下皆己ホ如かざるを視る、此智愚の分るゝ所以なり 自警編

○高上尊貴以て人よ驕らば、聰明聖智以て人ヲ窮せば、齊給速通爭て人よ先だゝば、剛毅勇敢以て人を傷はず、知らざきば問ひ、能せざれば學ぶ、能そと雖も必讓る、然る後德となれ 荀子

○人ハ隨ひて毀譽を爲さ者、昔人諸を矮人の戲場ニ觀るヨ譬ふ、其眞ハ見る所なきを以てなり、凡人ニ知れ共と審かニするヨ非んバ、人ヨ隨ひ輕〻しく毀譽を爲さ至らざれ、然らざれば、過さぎは者鮮し　慎思錄

○君子敬せざる事なし、敬ハ身を敬さるを大と爲ス、身ハ親の枝ニり、敢て敬せざらんや、其身を敬せざれハ、是其親ニ傷る、是本ニ傷る也、其本ニ傷れバ、枝之ニ從て亡ぶ　禮記

第十一

○人の世ハ在るや、必ず愛憎ニ私あり、是を以て褒譽實ヨ過る者あり、猜忌寃ニ爲す者あり、故ヨ人ハ毀譽、理ハ當らざる者多し、毀譽妄りヨ信ず至からず、古人曰く、公論百年ハして後定れと、豈然らずや　慎思錄

○君ハ事ハに進む難くし、退くを易くすれば、位ヨ次序あるて亂れば、進む難易くして、退く難くさきば、亂るゝ也、故ヨ君子ハ

三たび揖して進み、一たび辭して退く、以て亂ふ遠ざかるなり。禮記

○德盛んなる者は、その心和平、人皆交るべきを見る、德薄き者は、其心刻傲、人皆鄙む所なるを見る、人を觀る者、其許可する所多きを看きて、其德の厚なるを知る、其許可する所の少きを看れば、其德の薄なるを知る。人生必讀書

○貴い富を期せば、而して富至る、富は粱肉なり、期せば、而して粱肉至る、粱肉い驕奢を期きば、而して驕奢至る、驕奢い死亡を期せず、而して死亡至る、累世以前、此に坐する者多し。戰國策

○明の張念芝曰く、敬以て親ふ事ふきば親安し、敬以て長ふ事ふきば長安し、敬以て下なる御するれば左右婢妾の人安し、敬せざる所なければ、安んぜざる所なし、故ふ曰く、敬を忽にするなかれと。楊園集

○死友は過ちを彰さい、此は是第一の不仁

なり、生て之ゝ告ぐるや、其能く改むれを望む、彼之ゝ聞ゝ及ぶや、尚能く自から白を歿し、死して之を彰さにい、何の爲ぞや、實過あるを雖ども、吾爲めゝ之を掩さん　呻吟語

○毀譽榮辱の來る、獨以て其心を動かさゞ孰れみならば、且之を資り、以て切磋砥礪の地と爲を、故ゝ君子も入るとして自得せざるゝなし、若し譽を聞て喜び、毀を見て戚まで、其何ゝ以て君子と爲をん　王陽明ノ格言

○士ゝ妒友あきべ、賢交親志まば、君ゝ妒臣あれば、賢人至らば、公を蔽ふ者、之を昧といふ、良ゝ隱に者、之を妒といふ妒昧ゝ奉ぞる者、之を交譎といふ、交譎の人と、妒昧ゝ臣とハ、國ゝ蔵孽也　荀子

○凡遭ふゝ所ろゝ、患難、變故屈辱、讒謗、拂逆の事も、皆天の吾が才を老しむるゆゑん、砥礪切磋ゝ地ゝあらざるはなし、君子當をゝ之ゝ處を所以を慮るべし、徒らゝ之ゝ免

かきんと欲をど不可なり 言志錄

○夫聲ハ細くして聞へざれ事なし、行も隱きて形れぞる事なし、玉、山ヨ居て木潤ひ、淵、珠ヲ生ドて岸枯れず、善を爲して積まざるや、豈聞えばる事ヿらむや 大戴禮

○恐懼ふる者ハ、身ヲ修むるの本なり、事あれの前ヨ恐懼そきど畏る、畏ふれば以て禍ヲ免る歟し、事ありて後ヨ恐懼すきバ悔も、悔ゆきど以て過を寡くをべし、夫れ智者ハ畏る、故ふ身ヲ保ち、愚者も畏れば、故に身を殺ル 省心錄

○人の臣たる者、其身ヲ殺して、其君ふ大益あれ時も、之ヲなル、況んや其身を殺そに至らば、其君を善くするを得バ、勤勞ヲ厭はぞして、勉免ざはぞけんや 禮記

○凡智愚ハ他なし、書を讀むと、書ヲ讀まざるとヨ在ヨ、禍福も他なし、善を爲そと、善ヲ爲さバはやヨ在り、貧富ハ他なし、勤儉と、勤

儉からばるとゝ在ゝ、毀譽ハ他なし、仁恕と、仁恕ならぎるゝ在り 呻吟語

○君能く命を制するを義ゝなし、臣能く命を承ゝ信となし、信を以て義を戴いて之を行ふを利ゝなし、謀りて利を失はば、以て能く社稷を守ゝハ、民の主也 左傳

○幼學の士も、先づ人品上下を分別せん去ゝ要に、何者か是下愚爲す所ゝ事、善ゝ向ひ、惡ゝ背き、彼を去ゝ、此を取る、此幼學當さゝ先んぜ務き所なり 明陳忠肅ノ格言

○父母沒そといへゝも、將ゝ善を爲んとすきで、父母ゝ令名を貽らん事を思ふて、必ず果に、將ゝ不善を爲んゝをれば、父母ゝ羞辱を貽らん事を思ふて、必ず果さば 禮記

○余毎ゝ寒士の將さゝ達せんとするを見るゝ、必ず一段謙光の氣あり、恂々款々として敢て人ゝ先だゝず、或ハ侮を受けて答へ

ず、或て謗を聞て辨をび、人之を見て愛を生
く敬を生し 明京坤儀ノ格言

○人を知る者ハ智、自ら知る者ハ明、人を勝
つ者ハ力あり、自ら勝つ者は強し、足る事を
知る者ハ富み、強め行ふ者て志あり、其所を
失はざる者て久し、小を見る者を明といひ、柔
を守る者を強と云ふ 老子

○清の魏天民子を教へ、師傅を敬重し、飲食
必ず親から視る、嘗て曰く、人其子孫の賢か

らんことを冀ひ、而して其師を敬せざるて、
猶身を養てんと欲して、反て其衣食を損ぜ
ざるが如し 今世説

○少年輩、妄りに己が才智を許して、大なり
と爲る者あり、此醉客の自から信じて、十分
嚴肅なりと爲るが如し、甚しき不幸なり、少
年輩、活氣を尚とび、顧慮なく事をなし、反て
老成の練熟に勝まると思ふ者あり、是既に
事の半を敗まる者なり 智氏家訓

○衆口は禍福の門也、是を以て、君子い衆に省みて動ぢ、監戒して謀り、謀度して行ふ、故に濟らざる事をなし、内謀を外度り、考省倦まず、且日々に考へて習へば、戒備畢る　國語

○女い容よりも、心の勝れたるを善とすべし、心ばへをしなぢ、心騷しく、眼恐ろしく見出して、人を怒る、言辭あらゝかに、物言ひはがましく、口きゝて人に先ざち、人に恨み嫉み、我身に誇り、人を謗る笑ひ、わき人ふ勝る貌なるも、皆女の道ふ違えるなり、女い惟和らぢ順ひて、貞心に情け深く、静かなるをよしとせり　女大學

○人の己に愛をむを欲せば、必先づ人を愛し、人に己ふ從ふを欲せば、必先ず人に從ふ、人ふ德をほことせずして、人ふ用ゐらるむ事に求むるい罪也、敬は德の格也、德に恪志べ、以て事に臨みて、何事か濟らざらむ　國語

○二人同舟往く所あり、一人性急なり、晝夜

程を計り、稍阻めず、輒憤懣し、形枯瘁を爲に、一人性緩かり、之を任じて食を増し、寢を甘んじ、顏色日に澤ふ、既にして其處に抵り、二人同時岸に登る、此を以て躁心者の戒と爲す。明劉時卿の格言

○君子と行ひ苟も難き所貴ぶに、說は苟も察せる所貴ばず、名は苟も傳るを貴ぶ、唯其當を貴しと爲に、知は疑を棄るを大なれとなく、行は過なきを大なるはなく、事は悔なきより大なるはなし。荀子

○人の病、好て其長を談ずるに在り、功名は長ずる者は、動もすれば輒功名を誇り、文章に長ずる者は、動もすれば輒文章を誇る、此皆其長ずる所を露して、其長ずる所を養ふ能はざる者なり、唯智者言を慎む故に能く其長を保つ。明王耐軒の格言

第十二

○女の位を内に正し、男の位を外に正し、男女正

志記し、天地の大義なり、家人に嚴君有り、父母の謂ひなり、父は父たり、子は子あり、兄は兄たり、弟は弟たり、夫は夫たり、婦は婦たり、而して家道正し、家を正しくして、天下定まる　周易

○年少の子弟は、未だ世事を經ず、人情に達せず、老人の言を以て、迂遠なりとして、時勢に合はずとし、父祖を蔑視する者あり、假令其人才能ありとも、未だ世事を閲歴せざれば、老人の迂遠なるに比べ劣れり、故に年長け事を經るに及びて、始めて其言の理あるを悟る　家道訓

○墨子は素絲を深る者を見て、歎じて曰く、蒼に染むれば蒼、黄に染れば黄、入る所以の者變ずれば、其色變じ、五入して以て五色となる、故に染は、慎まざるべからざる也　呂氏春秋

○家の主たる者は、其身を修め、其家を興す、以て志となし、先づ父祖より傳へきる財

産を、失ひざるを以て孝と爲すべし、天災よりして財産を失ふも、人力に能く及ぶ所ゝ非ず、己不德よりて之を失ひ、或ハ之を減耗せるも、大なる不孝と謂ふべし　家道訓

○凡人の子弟となれ、須からく是常に聲を低くし氣を下し、語言詳緩にして高言諠閧浮言戲笑をべからず、父兄長上教督する所ゝのきべ、但當ゝ首を垂れて聽受をべし、妄りに自ら議論をべからず　童蒙須知

○小人も當さゝ之を始より遠くべし、一飲一食も之と交接をべからず、泛然相識らざるが如くなれば、怨ミなく尤めなし、若しその才能を愛し、或ハ其に勢力を借り、一さび與に親密かきべ、後來必ず大難を為さん　願體集

○衣食住の三に者も、我ゞ分より輕くをべし、我に適當せりと思ふハ、已ゝ分に過ぎたるなり、只親を養ふも、本み報ずる道かきむ、我ゞ分を忘きて、財を惜むべからず、又人

を救助するなどをし、分に隨ひ力を盡をつ、是人を恤み、人に交るの道なり 家道訓

○必ず容ることを有きべ、德乃大なる、必ず忍ぶことあれば、事乃濟る、一毫の心に咈ることなきべ、即ち勃然として怒り、一事に心に違ふことあれば、即ち憤然として發を、是涵養の力なし、薄福の人なり、故に曰く、人に詐る事を覺るを、言に形しはゞれば、限り羽化の味あり 昨非庵日纂

○子を愛をる者は子に慈に、生を重んぜる者は身に慈す、功を貴ぶ者は事に慈す、慈母の弱子に於るや、務其福を致に時は、事其禍を除く、事其禍を除けば、思慮熟す、思慮熟れば、事理を得、事理を得きば、必功を成す 韓非子

○氣を尚び、勝を好むは、人の常情と雖ども、小利を爭ひて、大義を忘れ、虛氣を尚びて、實禍を釀を盃からば、世人或は尺地を爭ひて、數千貫を費し、或て一言に忿み其身を忘れ、

以て其親に及ぶに者あり、若し能く含容忍耐し、人の和解せば聽かば、財を省き力せば省き、心身安寧ならん　願體集

○名と身と孰か親しき、身と貨と孰か多なる、得と亡と孰か病しき、甚だ愛すれば必大に費やし、多く藏すれば必厚く亡ふ、足るを知れば殆うからず、以て長久なるべし　老子

○德は本也、財は末也、本を外にし、末を内とすれば、民を爭はしめ、奪ことを施す、是故に財聚まれば民散じ、財散ずれば民聚る、是故に言悖りて出るは者は、亦悖りて入る、貨悖りて入るは者も、亦悖りて出づ　大學

○凡婢僕を待するに、必端嚴之と嬉笑するを得る勿れ、器皿を執る、必端嚴惟失あらむを恐れよ、凡危險に近くべからば、凡道路長者に遇へば、必正立して手を拱し、疾く趨りて揖せ、凡夜卧必枕を用ゐ、寢衣を以て首を覆ふ勿れ　童蒙須知

○善を見て、修然必ず以て自ら存そる也、不善を見て、愀然必ず以て自ら省そる也、善身に在れば、介然必ず以て自ら好とする也、不善身に在れば、蓄然必ず以て自ら惡む也、故に我を非として當る者は吾カ友也荀子

○芝蘭深林に生じ、人無き故以て芳しからぬにあらず、君子道を修め德を立つ、窮困の爲めにして節を改めず、財を貪る者之を

貧と云ふ、道を學びて行ふ能はざる者、之を病と云ふ孔子家語

○貝原益軒曰く、他人の家に赴いて話せば、須らく朝饔晩飧の時を避くべし、主人事あるの時を妨ぐべからず、人の爲めに厭しる者は、客たれば禮に非ず、凡そ客となる者は、故なくして非ずして、緩坐して時を費し、主人を煩はして、倦怠をしむべからず慎思錄

○君子深く之に造るに道を以てす、其自ら

之を得んと欲するなり、自らこれを得れば、之に居る事安し、之に居るときは安けきば、之を資ること深し、之を資れば深ければ、之を左右に取りて、其原に逢ふ、故に君子は其自らこれを得んと欲するなり　孟子

○人は妻たるものは、嫉妬の心努々起すべからず、夫もし不義過あらば、わが色を和らげ、聲を柔らにして諫むべし、諫め聽かざれば、怒らば、先暫く止めて、後に夫の心和らぎたる時、復諫むべし、必ず氣色を暴くし、聲をいらゝげて夫に逆ひ叛くときは、なかれ　女大學

○多言なれば、多事なるなり、多事なれば患多し、安樂必ず戒むべし、悔ある所を行ふなかれ、何ぞ傷らんと謂ふなかれ、其禍將に長ぜんとす、何ぞ害あらんと謂ふ勿れ、其禍將に大ならむとす　孔子家語

○發して然る後禁ずれば、扞格して勝えず、時過ぎて然して後學ぶれば、勤苦して成り難

し、雜施し〻孫せざれハ、壞亂し〻ゑ修まらじ、獨學て友なけきむ、孤陋ゑして聞く事寡し、燕朋し其師ゑ逆ひ、燕辟し其學ゑ廢し、此六つゑ者ハ、教の由て廢そゑ所なり 禮記

小學初等修身幼訓卷の四 終

明治十五年三月廿八日版權免許
同 十五年五月 出版

定價八錢

東京府士族 木澤成肅
下谷區下谷西町壹番地

編纂人 同 士族 辻謙之介
本郷區本郷元町壹丁目六番地

出版人 同 平民 阪上半七
日本橋區吳服町十三番地

出版人 同 平民 北畠茂兵衛
同區通壹丁目

發兌人

木澤成肅編纂

小學初等脩身幼訓

卷五

東京帝國大學本部教育會書籍館
第二室
四函 二架 二七九四号 九冊
函一架一號

K110.1
47
5